

荒木家資料について

荒木家文書344点は、平成7年初夏、伊那市東春近にお住いの、現荒木家当主、荒木博氏の御好意により、当館へ寄贈されたものである。

荒木家々系図によれば、荒木家の祖先は、摂津の有力武士であったが、後に織田信長に反逆して敗れ、その一族郎党の総てを惨殺されたといわれる、有名な悲劇の勇将荒木村重であるという。

その後、母方の姓奥村を名乗り、元禄八年頃内藤侯に召し抱えられ、以後七代にわたり、明治維新に至るまでの百七十年間余、高遠藩士であった。(文化年間、また、本姓の荒木姓に改名) 荒木家は、代々家禄ほぼ百石、御武具奉行、御金奉行、御旗奉行、大目付、御使番、元々役、郡代、御側用人など、藩内の要職を歴任した給人の家柄であった。

荒木家文書の年代は、天保以後幕末頃のものが多く、ほぼ三分の二程が私文書に類する物であるが、天保年間の写本「臣下代々録一～五」「御役年代記 五巻」などは、高遠藩の基礎的資料として非常に貴重な物であり、また、戊辰戦争従軍の記録「北越応援日誌」には、若い高遠藩将兵の様子が生々しく伝えられており、官軍の錦布の袖印など、珍しい物も残されている。

多くの私文書の中には、家族の冠婚葬祭に関する詳細な諸控書があり、当時の風習や、交際の範囲などを知るための大切な手掛かりともなる資料であり、また、維新後、山梨県警察巡查勤務中の諸控書なども、明治初期の地方警察の機構や、治安の状態などを伝える興味ある資料と思われる。

池上家資料について

池上家資料は、高遠町西高遠鉾持町で、酢・醤油などの醸造販売を生業とした、古い商家に大切に保存されてきた947点に及ぶ資料である。

現在、池上家は『高遠町商家民俗資料館』となっていて、江戸時代の商家の家屋の内部をつぶさに見ることができる。その上、古くより持ち伝えた数々の生活道具類が、この家の人々が暮らしていた時そのままに置かれていて、ここを訪れる多くの人々に、当時の商家の暮らしの有様を具体的に伝えてくれる。

池上家の祖先は古く、甲州武田家の番匠であったと言われているが、江戸時代初期の頃から、代々鉾持町丁代として、或いは町名主として、高遠の町方行政の枢要に深くかかわって来たようである。したがって、池上家資料の主たる物は町方支配に関する資料であり、殊に江戸中期から明治初期までの間に、高遠町内に生じた種々の事柄は、殆どこの資料の中に見出すことが出来ると言っても過言ではない。

その主なる基本的資料には、

* 御用留書帳	……………	元禄～文政
* 諸色御用控帳	……………	宝暦～明治
* 御触留帳	……………	元禄～慶応
* 丁代諸用留	……………	享和～明治
* 諸願書控帳	……………	文化～慶応
* 五人組帳	……………	享保～慶応
* 宗門人別御改帳	……………	宝暦～明治
* 家筋軒別書上帳	……………	天保・安政
* 家数・間数・役付の覚	……………	元禄～明治

などがあり、他にも「伊能忠敬の全国測量関係資料」「幕末期降札事件（ええじゃないか）関係資料」など興味深い資料は数えきれないほどである。

さらに、「池上商店関係資料」には、酢・醤油等の醸造に関する資料と共に、各年代に亘る売り上げ帳、出納帳・^{かよ}通帳などが残されており、当時の商品の仕入れや流通、またその規模などを知る上での貴重な資料となることであろう。

「池上私家資料」には、明治初期から大正初期にかけて書かれた日記、冠婚葬祭に関する多くの記録、年中行事の献立から御年玉の金額までの覚書等、これもまた、当時の人々の暮らしを知るための大切な資料である。

平成10年10月

高遠町図書館

石川家資料について

石川家資料は、目録前半の71点が平成7年に、さらに後半の391点(2)、43点(3)が平成18年に当館に寄贈されたものである。

石川家は天正時代に松本城主であった石川数正の支族の一流であったといわれ、石川氏が大分県佐伯に改易となった後、帰農して竹入の姓を名乗り、上伊那郷今村辺に住していたと伝えられている。高遠藩の記録では、明和年代高遠藩に召し抱えられ、以後三代にわたり、明治の廃藩に至るまで、御山方、御薪方、御蔵方、郷方物書、地方代官などの諸御役を勤めた。明治以後は、高遠町内で絹織物工場などを経営し、近在の女性たちに働き場を提供してしたようである。

特に石川維徳(重左衛門、字・小温、この代より石川の姓に戻る)は、和算、天文、暦学者として名高く、『窮源算法』『算学階梯』など関流和算の書に工夫・改訂を加えて、この地方に多くの優秀な門人を育てた。さらに、測量の技術にも優れ、藩内の地図御用係りを命ぜられ、自ら測量機を考案して、当時としては非常に正確な地図を製作したといわれる。

この資料の中にも、多数の絵図面類があり、『高遠城図』『信州高遠古図』『小川町藩邸之図』などは高遠にとって非常に貴重な物であり、領内各村々の小絵図や、中山道への助郷関係の絵図面なども珍しく、興味深いものである。勿論、和算、天文、暦学関係の諸資料も多く、これらは今後の解明が待たれるところである。

また、江戸時代の家塾で使われたと思われる、『往来物』を始めとする、多くの手習い用手本類もあり、句集その他多数の写本もあって、石川家の人々の趣味の広さを伺わされるところである。

平成22年2月 高遠町図書館

いてふ屋資料について

この「いてふ屋資料」と名付けられた282点の資料は、所蔵者の池上宗一氏（高遠町・千年町住）の御好意により、平成8年12月、当館へ寄贈されたものである。

いてふ屋（銀杏屋）は、古くは承応年中（1650年頃）すでに鉾持村に御縄請けの地を所持していたという記録があるが、その後、寛文の頃（1660年代）から鍛冶屋・作左衛門と名乗って勢利町に住み、内藤侯が高遠領に入部した頃には、勢利町の丁代を勤めており、代々鍛冶職を家業としていた。

元禄13年頃、鉾持町に家屋敷を求めて移り住み、享保（1720年代）以後、代々鉾持町丁代を勤め、二代目銀杏屋・宗八は御本丸御門の御金物細工に従事しその功により白壁御免となった。四代・十三郎は寛政7年（1795年）御領分中四職人目付を仰付けられ、五代・宗八も同目付と御細工御用達を兼ね、六代十三郎も又、維新の頃明治の新政府から鉄砲職目付に任じられている。

したがって、「いてふ屋資料」の主なるものは、鉾持町丁代として関わった町方関係文書と、四職人目付として関わった職人関係文書とであるが、鉾持神社の祭礼の屋台狂言に関する文書なども興味深いものである。二百年余の歳月を越えて、大切に保存されてきた、これらの文書から、私達は町に住む普通の人々の身の回りに起こる種々の出来事やその処理の仕組みなどを知り、江戸時代後期の高遠町の様子や、そこに住んでいた人達の暮らしと、その心情を理解する手掛かりを得ていきたいものである。

平成9年2月

高遠町図書館

伊藤秀夫家資料について

伊藤秀夫家資料は、平成7年秋、御当主の伊藤秀夫氏によって、当館に寄贈された199点の文書類と、約28点の諸道具類である。

伊藤家の先祖の名前は、宝暦年中（1760年代）頃から、高遠藩士の勤仕録の中に記録されており、藩内での御役目は、代々御山奉行下役として山林関係の世話係や、元々役所の物書、御払い方などを勤めていた様である。

伊藤家資料の中で、最も目に付く物は、何ととっても荒木流の諸武芸の伝授書等、武術関係の文書である。

伊藤家は、殊のほか熱心に武術に励み、道場を持って、何代にもわたって高遠藩内で、下級武士達の師範を勤めたと思われる。入門に際しては、厳重な誓詞を提出させたものらしく、血判の跡も生々しい書付も、沢山残されている。

明治維新の混乱期、戊辰の戦役に参戦した際の、官軍『北陸道先鋒会計方』発行の通行証等、珍しい物も見つかった。

道具類には、主として明治初期から大正にかけての身の回りの古道具類や、庶民のちょっとしたお宝物（メダルや時計）など、当時の生活の有様を彷彿させる物があり、丁寧に作られた押絵のお雛様もあった

明治40年頃作られた、裁縫用の諸衣類の見本は、正確に縮尺された、手の込んだ物で、当時の女性たちの、裁縫に対する熱い気持ちを感じさせる品である。

岩崎資料について

私の家には、昔から古記録や帳簿類が長持ちや用筆筒に沢山つまっていた、無論高遠藩に関係した物ばかりだ。それに私の祖父博秋は幕末から明治維新当時が働き盛りで、各方面に活躍した事も聞いているから、いつか閑地を得たら此の資料を整理して研究家の便をはかる様系統立てて置きたい。そうしなければ惜しいものだと考えていた。

私の家は元来士族とは名ばかりで軽輩の仲間だ、豊臣末期の岩崎左門や保科弾正の小姓岩崎十三郎という昔の小学読本に載っていた人達と何かの関係はあるかも知れぬが、民間にいて内藤家へ奉仕し始めたのは宝永五年で手当ては僅か三両二人扶持であった。

徳川中世からの私の先祖は揃って長寿を保ち、三代続いて維新後迄種々の重要事務につき、藩中の生字引と迄云われた程だとの事である。

- 一 宅右衛門吉忠 安永元年より文政五年迄勤仕 享年七十七
- 二 源蔵（宅右衛門）信懋 寛政二年より嘉永二年迄勤仕 享年七十六
- 三 覚左衛門博秋（湊） 嘉永二年より廃藩迄 享年七十二

天保大火後、高遠町復興の為め町代官を特設信懋は其重責を果し、博秋は数理測量の奥儀を究め文久三年三十九才にして抜擢され代官となり、洗馬、藤沢、上伊那の三郷の支配を命ぜられ明治三年以後は山林奉行を勤めた。

又特に博秋は筆達者でよく記録を残した。私事日記は養子に來た嘉永二年から明治二十七年まで、五十一年間つけ通した。代官になってからは公務日誌（御用控）と（役向日記）と三通宛て怠りなく書いた。維新の改革成ってから藩時代の記録を彼是と調べて記録に残した。

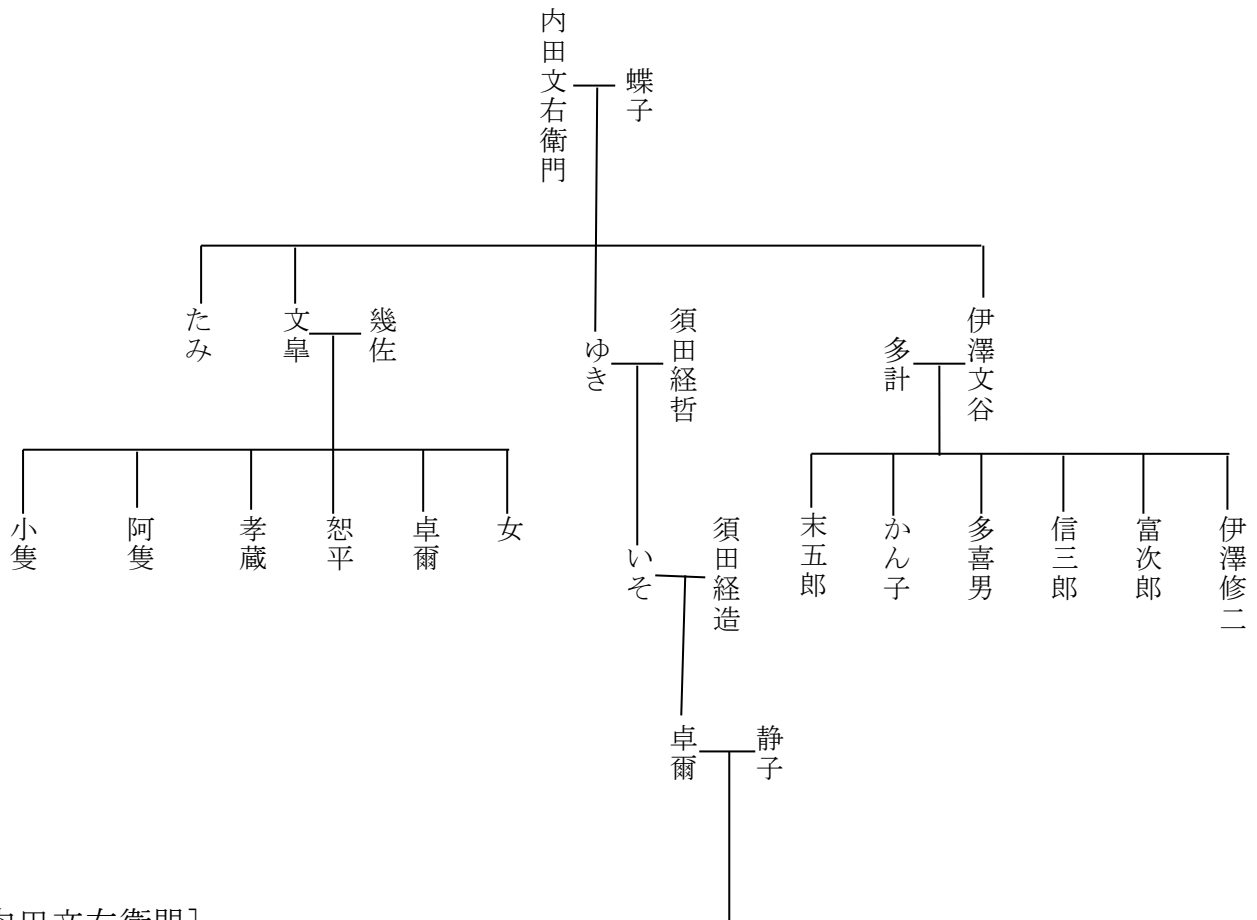
旧幕時代といえれば大体徳川氏の政策綱領に準拠して藩政も行われた様だが、又各藩独自の行政や慣習があったのだ。高遠藩史研究の資料たるばかりでなく、県下他藩に就ても或程度の研究資料ではあるまいか。

昭和27年夏 岩崎 三蔵 誌

平成五年夏、岩崎善信氏は此の膨大で貴重な岩崎資料を高遠町に寄贈した。これにより高遠藩研究が大いに進展するであろう。

高遠町図書館

内田家々系略図



[内田文右衛門]

敬忠・準一

高遠藩士、文政四年御先手組入り、御坊主を経て文政十年御用人中書役、嘉永二年御供番格、二十俵二人扶持、進徳館筆学助教。明治以後小学校で教鞭をとる。

[内田文臯]

敬義・徳一郎・淡水

文右衛門長男、御坊主勤めを経て御手留役（書役の助手）

明治以後は藩庁の駅通係り、史生等を勤め、その後郡下小学校で教鞭をとる。

画家でもある。

[須田経哲・卓爾]

経哲・泰嶺、文右衛門二女ゆきと結婚、当時先端の外科医。

卓爾・文臯長男、須田家を継ぐ、ドイツ留学後眼科医。

大下家資料について

平成27年9月、高遠藩士末裔の大下仁氏より、所有する古文書の寄託依頼があった。

資料には、高遠城曲輪の詳細絵図や、城内へ水を引いた際の経路図、砲術や軍学の免許状、大坂冬・夏の陣の配置図、諸絵図等があり、特に高遠城関係資料は新出資料であり、今後の高遠城研究のためには必須の資料である。

①高遠城と御用水に関する新出資料（1-7, 1-8, 1-9）

高遠城内へ沢水を引く計画図で、城内の南曲輪の詳細が分かる図面が付属している。

引水ルートは今まではっきりしていなかったもので、新出資料として今後の研究が期待される。また、南曲輪の泉水や植栽の配置が寸法とともにえがかれており城内の庭園がどのような姿だったのかを知ることができる貴重な資料である。

②高遠藩士の席順表や勤仕録（1-4, 1-12～14）

高遠藩士の階級や廃藩時の様子がわかる資料である。

③砲術や軍学等の武術免許状と関連書物

武士の本文ともいえる武術に関する免許や教本。

④大坂城の絵図（3-4～7, 3-12）

大坂夏の陣・冬の陣の配置図で、後年の写しと思われる。真田丸等の記載も見える。

⑤林子平図（写し）や蝦夷地関係の絵図（3-2-1～5, 3-3, 3-9, 3-19, 3-20）

江戸時代後期の海防学者、林子平が著した『三国通覧図説』の付図を写した絵図で、伊豆大島や蝦夷地や琉球等を描いたもの。

⑥中村元恒、元起に関する資料（3-11, 4-6～8）

中村家旧蔵の絵図（「希月舎蔵」印）や、中村元恒、元起の業績をまとめた資料。

元起が藩校進徳館で行った指導方法等も記されている。

⑦大下家の家譜や日記等私家資料（5-2～7）

小田切家（ふじたや旧蔵）資料について

小田切家（ふじたや旧蔵）資料は、西高遠諸町の「ふじたや」（中村家東隣）の家屋内にあった資料である。

平成29年、中村家改修の際、「ふじたや」の敷地部分を借用改修の上、一体的に整備を行ったが、その時搬出された資料を、令和元年9月、当主の伊藤優氏より寄贈された。

主な内容は、念仏講の帳面、不幸時の帳面、高遠尋常小学校卒業証明書、明治時代の書簡などで、いずれも「小田切」の名前が見られるため、元々小田切家で所有していたものと思われる。

元々この建物には、「ふじたや」の親戚が住んでいて、後に「ふじたや」の所有となったため、かつて住んでいた人に関する資料とみられる。

令和2年6月

伊那市高遠町図書館

小野寺家資料について

小野寺家文書は、80点に及ぶ当館所蔵の文書群である

小野寺家は、初代藤右衛門が、延宝八年（1680）御金奉行を仰せ付けられて以来、明治に至る迄約190年間の長きに亘って内藤家に仕え、家禄150石～200石、代々御武具奉行、御旗奉行、御普請奉行、御勘定奉行、大目付、郡代、御物頭、御用役等、藩の要職を歴任し、特に四代目の藤助は、御年寄役をも勤めた高遠藩の上級武士の家柄である。

小野寺家文書の中で最も目に付くものは、多数の武芸伝授書の類と、小笠原流礼法の免許状である。これらは、上級武士の家にとっては重要な文書であったのであろうか、非常に大切に保存されていた様子である。

その他、大目付や郡代等役中の諸書留類、日記の類等、当時の高遠藩の様子を知る上で参考となる、興味深い資料も多い。

中でも、廃藩直後の親藩庁において、貨幣掛りを勤めた人の、三冊に及ぶ日録等は、明治維新政府誕生時の貨幣の混乱ぶりを伝えていて、興味深い。

小野寺家文書には、私的文書は余り多くはないが、細々と記された『料理法覚書』があり、味噌醤油の作り方から各種漬物類、餅、粽（ちまき）等の作り方迄、丹念に書かれた料理ノートは、当時の食生活を物語る貴重な一冊である。

これら文書は、いずれも丁寧に保存され、虫損も少なくきれいで読みやすい物が多いので、多くの方々がこれらの資料に目を通され、江戸時代の高遠に関する知識を深める手掛かりとしていきたいものである。